

コメント

奥野 志偉

景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性に関するコメント

まず、藤永は、記録としての写真、資料の写真の場合には、写真資料を扱う上の課題として、写真の中の景観を正しく読むことが重要だと指摘した。また、写真の中の目に見えない作用を探り出すことが写真の景観資料としての可能性を広げると主張する。次に浜田は、景観分析における写真の資料化と体系化に向けて、①同じ地点の時系列変化の検討と②同時代の各地における景観変化の差異の検討との2つの方法を提唱し、また可視面（景観要素）から不可視の側面（経済社会生活）を読み取るのが重要だと指摘した。

次にこの「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」セッションの全体に対して5点のコメントもしくは質問を述べたい。

- (1) 「澁澤写真」の目録作成はいつ完成されるか。
- (2) 「澁澤写真」のウェブ上の公開、写真集の出版に向けてどのような課題があるのか。
- (3) 今回大会のテーマである非文字の資料化・体系化に向けて「景観写真データベース」の作業が必要であろうか、それはどのように、また、どこまで進んでいるか。データベースの景観項目は何か。
- (4) 時空コンテキストにみる写真分析の可能性
縦軸を時間とし、横軸を空間・地域とする時空のコンテキストにしてみれば、これまでの藤永、浜田の写真分析の成果は、点（1場所、1時点）から点—線（1地点の時系列の移り変わり、図1）まで延長することができる。これから「点—線—面」（すなわち、多地域における多場所の時系列の関連性、たとえば、日中韓の地域比較研究、図2）かつ「点—線—ネットワーク」（すなわち、テーマを持った地域間の多地点の関連性を探る研究、図3）への展開が期待したい。テーマの例は近海漁業・漁村の景観変化、地域の近代化と都市化における景観の遷移、東アジア地域における原風景の探査など。
- (5) また、著名なその他の方の撮影した写真・文献の異同性・関連性を探ることによって景観写真の可能性を拡大することもできよう。例えば、イギリスの女性探検家・地理学者・宣教師のイザベラ・バードの紀行書『Beyond the Yangtze Valley』（原本は1898年にロンドンで出版、その翻訳版は金坂清則訳『イザベラ・バード極東の旅1、2』、同『中国奥地紀行（写真集、写真等計117枚）』2005年、平凡社東洋文庫出版）との比較研究を進めること。

図1 時空コンテキスト(Spatial-Temporal Context)にみる写真分析の可能性

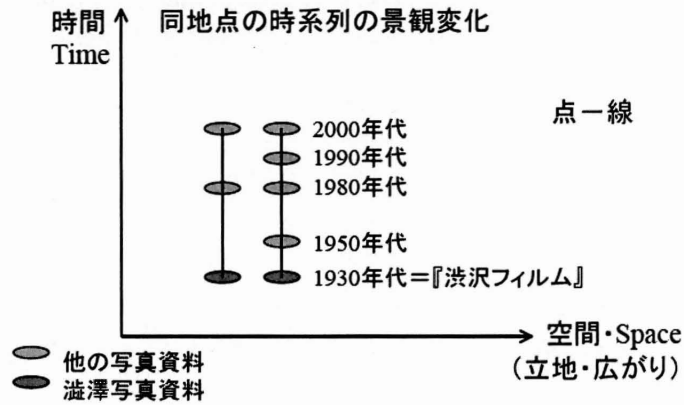


図2 点-線-面の景観分析

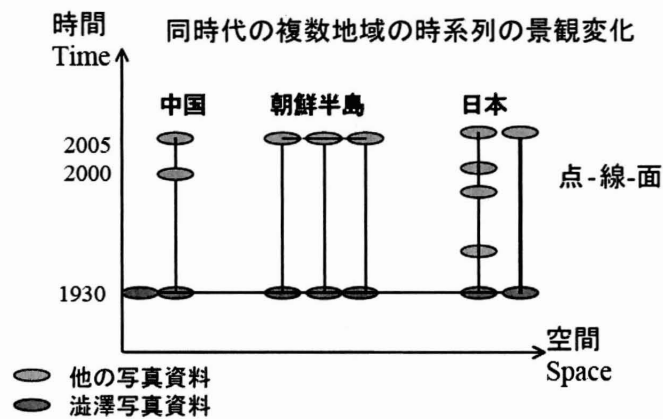


図3 テーマに基づき点-線-ネットワークへ

